

ファニー・プライスの実像

——『マンズフィールド・パーク』に関する物語論的考察*

廣 野 由 美 子

1. はじめに——女主人公の造形

ファニー・プライスと言えば、オースティンの作品中の女主人公のなかでも、最もおとなしく存在感の希薄な、魅力に乏しいヒロインであるという一般的印象があり、批評においても、そのようなイメージが定着してきた。D・W・ハーディングは、『マンズフィールド・パーク』（1814）では、女主人公の価値が大部分、「因習的な美德や洗練された上品さ、礼節、堅実な信仰」への忠誠心に置かれているため、「ファニー・プライスはすべての女主人公のなかで、最も面白くない人物だ」¹と述べている。ライオネル・トリリングも、『マンズフィールド・パーク』の女主人公を好きになれる者は、誰もいないと思う。ファニー・プライスが有徳の人物であることは、公然としていて、かつ

* 本稿は、日本オースティン協会第3回大会（2009年10月3日、白百合女子大学）のシンポジウム「*Mansfield Park*を読む——Fanny Priceを中心に」において行った発表に加筆したものである。

1 D. W. Harding, “Regulated Hatred: An Aspect of the Work of Jane Austen”(1940), *Regulated Hatred and Other Essays on Jane Austen* (London: Athlone, 1998), pp.18-19.

自覚されている。現代の文学的感覚からすると、有徳であろうとし、目標に到達するすがわがわかったうえで、それを達成するような人物には、強く反発を覚えるものだ²と主張する。さらにキングズリ・エイミスは、「ファニーの考えや感じ方は、何らユーモアによっても、あるいは——これがジェイン・オースティンなのかと思うほど——明るさによっても、緩和されることのない自愛ゆえに、忌わしいものだ³と酷評している。

しかし、本当にファニーは正しく理解されているのだろうかという疑念が、筆者には拭い去ることができない。ファニーを、ヒロインとしてではなく無力な子供として捉えることによって読者の共感を促すメアリー・ラサルズの議論⁴や、18世紀～19世紀はじめに流行していた儀礼指南書（*courtesy book/conduct book*）が推奨する模範的女性像を具現した人物であると捉えて、歴史的コンテクストから弁護しようとするメアリアン・ファウラーの説⁵なども、かえってファニーの真の姿を遠ざけ、作品の解釈を狭めるもののように思える。

女主人公に関して賛否いずれの立場に立つにせよ、読者は、作者が小説に仕組んだ「仕掛け」に誘導されて、思い込みに陥っているだけなのではないか？ 真の姿は周到に隠されているけれども、実はファニーは、一般的イメージとはかなり異なった人物なのではないか？ こうした疑念を出発点として、ファニー・プライスの実像に迫ってみるという試みが、本稿の目的である。また、もし印象と実像との間に差異があるならば、作者のねらいは何なのか、言い換

2 Lionel Trilling, *The Opposing Self: Nine Essays in Criticism* (1955), *Mansfield Park*, ed. Claudia L. Johnson, Norton Critical Edition (New York: Norton, 1998), p.425.

3 Kingsley Amis, "What Became of Jane Austen?" (1957), *Jane Austen: Critical Assessments*, ed. Ian Littlewood, 4 vols (Mountfield: Helm Information, 1998), Vol. IV, p.76.

4 Mary Lascelles, Introduction to *Mansfield Park* (London: Oxford University Press, 1929), pp.xii-xiii.

5 Marian E. Fowler, "The Courtesy-Book Heroine of *Mansfield Park*," Littlewood (ed.), pp.152-66.

えると、女主人公の真の姿を隠すことによって、オースティンがこの小説で書きたかったことは何だったのかという問題についても、考察を発展させたい。

そのさい、方法論としては、テキストの語りを分析する物語論的アプローチを土台とする。この小説では、「全知の語り手」が語る三人称形式が取られている。オースティンの他の三人称小説と比較すると、全知の語り手の介入度もかなり高く、彼女の小説としては珍しく、語り手が「私」と名乗って顔を出し、意見を述べる箇所も、わずかながら見られる。また、ジョン・ウィルトシャも指摘するとおり、この作品では語り手が、単一の支配的な意識に制限されることなく、すべての登場人物の意識の中を出入りし、「語りのオーケストレーション」を形成している⁶。しかし、本稿では、特にファニーをとおして見たことや聞いたことなどが描かれ、彼女の意識や心理が語りに混在している箇所、すなわち、ナラトロジーの用語で言うところのファニーが「焦点人物」(focalizer)になっている箇所を中心に、テキストから例を挙げながら検討してゆきたい。

そこで、具体的な検討に入る前にまず、ファニーの印象を形成するために、オースティンがどのような「仕掛け」を作品に施しているかという点から確認しておこう。ファニーがおとなしい人物であるとの印象をもたらす第一の要因は、彼女の境遇にある。彼女は、貧しい子沢山のプライス家の長女で、一家を苦境から救うための、いわば口減らしのために、裕福な伯母の家庭パートラム家に引き取られる。つまりファニーは、肩身の狭い居候の身という設定になっているわけだ。

ここに「意地悪な継母」役が登場するというのはよくあるパターンだが、この立場にあるレディー・パートラムは、怠惰で自己中心的ではあるが、むしろファニーに頼る弱々しい人物である。その代わりに、この作品には「意地悪な

6 John Wiltshire, "Mansfield Park, Emma, Persuasion," *The Cambridge Companion to Jane Austen*. ed. Edward Copeland and Juliet McMaster (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp.59-66.

伯母」という強烈なキャラクターたるノリス夫人が登場する。「オースティンが創造した不愉快な人物たちのなかでも、最も忘れがたい嫌な人間」⁷と呼んでまず間違いのないノリス夫人は、ファニーに恩人風を吹かせながら、パートラム家の姪たちと差別し、あらゆる機会を捕えてファニーをいじめ抜く。そのいじめは、読者も嫌悪感のあまりうんざりするような陰湿さである。ところが、ファニーはこのいじめに対して、ほとんど反抗しない。口答えひとつせず、心のなかで嫌だと思ったということさえ、ごく控えめにしか語られていない。これが、筆者にはいささか奇妙に思われる。というのも、あとでも述べるとおり、他の人物たちに対しては、ファニーが内心かなり批判的な考えを抱いていることを、語り手は明かしているのに、なぜかノリス夫人に関しては、夫人自らに、その悪辣さや自己撞着を露呈させるという方法をとるか、あるいは、あくまでも語り手による批判的なコメントを与えるに留め、ファニーの反抗心をあまり描こうとしないからだ。これが第二の要因である。

比較の一例として、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, 1847) を挙げてみよう。この小説でも、女主人公が少女時代に親戚の家に引き取られるという設定になっている。しかし、居候の身のジェインは、自分を疎外する義理の伯母リード夫人やその子供たちの不当な扱いに対して、憎しみを露わにしつつ、挑戦的な態度で接する。したがって、恵まれない境遇にあっても自己主張の強い女主人公という人物造形はありえることが、(30年余の隔たりがあるとはいえ) この例からも明らかである。たしかに、『ジェイン・エア』が一人称小説で、女主人公の感情が、語り手本人の声をとおして直接伝えられているという技法上の効果も、これには大きく作用している。しかし『マンスフィールド・パーク』も、三人称形式とはいっても、ファニーが焦点人物となり、彼女の目をおしてその思いが伝えられている部分が、かなり含まれているのである。

7 Amis, p.74.

そのような観点から見ると、ノリス夫人が執拗にファニーをいじめ、ファニーがそれに抵抗しないというパターンが、意図的に仕組まれているようにも取れる。つまり、「かわいそうな影の薄いおとなしい女主人公」というイメージを生み出すための、作者の操作が働いている可能性もある。

第三は、作者が女主人公を無口な人物として造形している点が挙げられる。ファニーは口数が少なく、会話の場面でも、ほとんど聞き役に徹していることが少なくない。しばらく登場人物たちの会話が続いている場面で、私たちはそこにファニーがいることさえ忘れるときがある。そういうとき、急にファニーがいたたまれず意を決したふうに、会話に加わってくるとき、あるいは、他の人たちの会話を聞いてファニーがどう思った、というような語り手の言葉が差し挟まれるとき、私たちはその場にファニーがいて、黙って一部始終を聞いていたという事実、気づかされる。

物静かであることは、性格がおとなしいという印象を生み出しがちだが、外面的印象と内実は必ずしも一致するとはかぎらない。自分の感情を抑制して表に出さないことが、性格の強さを示す場合もあろうし、言葉ではなく行動によって自己主張するというやり方もあるだろう。素人芝居への参加を拒否したり、ヘンリー・クロフォードの求婚を断ったりするというような、一見消極的なファニーの行動も、周囲の意見に屈せず自分の意思を押し通しているという点では、一種の行動の選択と見ることもできる。

すでに述べたとおり、作品中には、ファニーが焦点人物となっている部分が折々含まれている。そのような部分を中心にテキストを検討しながら、ファニーの実像を探ってゆきたい。以下、悪の観察、恋愛をめぐる情念、環境の問題などの観点から、既存のイメージとは異なるファニーの側面に光を当てる。

2. 悪の観察者——ファニーは innocent か？

アンガス・ウィルソンも指摘するように、オースティンの小説は、基本的

に、“good and evil”ではなく“right and wrong”を規範とする世界であると言える⁸。そこで描かれる「悪」は、主として、日常の対人関係における言動の内面に潜む道徳的誤りといったレベルに限られる。社会的な違反行為としては、他の作品では、せいぜい駆落ちくらいに留まるが、『マンスフィールド・パーク』では、一步踏み込み、男女の不義に関わる問題が扱われる。そのさい、作中で「悪」を観察する役割を担っているのが、ファニーである。物語には、ヘンリーをめぐるマライアとジュリアの三角関係、そして、婚約者のいるマライアと、ヘンリーの間に危険な関係が芽生え、やがて、ラッシワース夫人となった彼女が、彼と駆け落ちし転落するまでの経緯が描かれているが、ファニーはその顛末を、かなり微細なところまで観察している。

最初に、この三角関係が明確な形になるのは、ラッシワース家の屋敷を改良するために、パートラム家とクロフォード兄妹の一行がサザートンを訪問するという出来事においてである。すでに行きがけの馬車から、御者席のヘンリーの隣に誰が座るかをめぐって、姉妹の心に確執が生じる。

土地の検分に出かけたとき、一行は三つのグループに分かれる。第一はマライアとヘンリー、ラッシワース、第二はエドモンドとメアリー、ファニー、第三はジュリアとノリス夫人、ラッシワース夫人である。エドモンドとメアリーは、疲れたファニーをベンチで休憩させたまま、二人で林の中へと入って行く。ひとり取り残されたファニーが、二人の帰りを待っているところへ、第一のグループがやって来る。マライアとヘンリーが、鍵のかかった鉄門の向こうにある小山に登りたいと言い出したため、ラッシワースは鍵を取りに戻る。彼がその場を去ったあと、ヘンリーとマライアがどのような会話を交わし、いかなる行動をとったか、その一部始終をファニーはじっと観察している。

「サザートンをこれほど楽しく見ることは、もうないでしょう。来年の夏には、ここがぼくにあって、よい場所になっているとは思えない」と、ヘンリー

8 Angus Wilson, “Evil in the English Novel,” *Kenyon Review*, Vol. 29 (Mar. 1967).

は土地の改良にからめて、マライアに思わせぶりなことを言う。これを聞いて相手はぎくりとする。つまり、《来年の夏には、あなたが結婚してしまっているから、面白くない》という裏の意味が、マライアに伝わったわけで、彼女も含みのある言葉を返して、ヘンリーの真意を確認する。

そのあと二人は、次のように、比喩的な表現を通して、さらに意味深長な会話を続ける。

“ . . . Your prospects, however, are too fair to justify want of spirits. You have a very smiling scene before you.”

“Do you mean literally or figuratively? Literally, I conclude. Yes, certainly, the sun shines and the park looks very cheerful. But unluckily that iron gate, that ha-ha, give me a feeling of restraint and hardship. I cannot get out, as the starling said.” As she [Maria Bertram] spoke, and it was with expression, she walked to the gate; he [Henry Crawford] followed her. “Mr. Rushworth is so long fetching this key!”

“And for the world you would not get out without the key and without Mr. Rushworth’s authority and protection, or I think you might with little difficulty pass round the edge of the gate, here, with my assistance; I think it might be done, if you really wished to be more at large, and could allow yourself to think it not prohibited.”

“Prohibited! nonsense! I certainly can get out that way, and I will. Mr. Rushworth will be here in a moment you know – we shall not be out of sight.”

“Or if we are, Miss Price will be so good as to tell him, that he will find us near that knoll, the grove of oak on the knoll.”

Fanny, feeling all this to be wrong, could not help making an effort to prevent it (115-16; Vol.I, ch.10).⁹ [以下、下線は筆者による]

この部分はほとんど会話であるが、最後の一文（下線部）で、ファニーが会

9 以下、テキストとして、Jane Austen, *Mansfield Park*, ed. John Wiltshire (Cambridge: Cambridge University Press, 2005) を使用。

話をすべて聞いていたことがわかる。マライアは、自分が籠の中の鳥のように不自由な身だという言い回しを通して、自分にとってラッシュワースとの結婚が「束縛と苦痛」にすぎないことを仄めかす。それに対してヘンリーは、ここで「鍵」に象徴される夫の権威と保護がなくとも、マライア自身が望むなら、自分の助けを借りて門の脇を通り向こうへ行けるというような、かなり露骨な言い回しで誘惑している。すると、大胆になったマライアは、「自分は禁じられていない」と言い放ち、ラッシュワースを待たずにヘンリーと二人で、門の端を通って行こうとするのである。この出来事は、後に結婚生活に行き詰まったマライアが、ヘンリーと駆け落ちすることを予示していると言える¹⁰。

「これはすべてよくないことだと思ったファニーは、その行動を止めさせようと努めざるをなかつた」とあることから、ファニーが、二人の危険な雰囲気や言葉の奥に含まれた意味を、すべて読み取っていたことがわかる。“wrong”という言葉からもうかがわれるように、ファニーは、ここに何か悪の匂いを嗅ぎ取っている。

二人が去ったあと、遅れをとったジュリアがやって来て、悔しげに二人の後ろを追ってゆくさまも、ファニーは観察している。次に、鍵を取って来たラッシュワースが現れ、自分がひとり取り残されたと知って、屈辱感と嫉妬を露わにする。次の箇所は、ラッシュワースとファニーが会話する場面の一部である。

After an interval of silence, “I think they might as well have staid for me,” said he [Mr. Rushworth].

“Miss Bertram thought you would follow her.”

10 Q・D・リーヴィスは、サザートンの挿話では、「すべての行動が象徴的であり」、「あとの話の展開を予言する意味深長な言い回しやイメージで溢れている」と指摘する。Q. D. Leavis, Introduction to *Mansfield Park* (Macdonalds Illustrated Classics, 1957), *Jane Austen: Sense and Sensibility, Pride and Prejudice and Mansfield Park*, ed. B. C. Southam, Casebook Series (London: Macmillan, 1976), p.240.

“I should not have had to follow her if she had staid.”

This could not be denied, and Fanny was silenced. After another pause, he went on. . . . “
 . . . In my opinion, these Crawfords are no addition at all. We did very well without them.”

A small sigh escaped Fanny here, and she did not know how to contradict him (119; Vol.I, ch.10) .

ファニーはラッシュワースをなだめつつ、彼の言い分がもっともだと感じる。ラッシュワースはつねに愚鈍に描かれているが、ここは、そういう彼にも一理あって、読者にとっても笑えない箇所である。「クロフォード兄妹なんか、加わらなくてもよかったんだ。いなくても、我々は楽しくやっていたのだから」というラッシュワースの言葉を聞いて、「ファニーはかすかな溜息をもらした。どう反論してよいかわからなかったのだ」とある。この最後の一文は、制限された淡々とした表現であるが、奥深い。この「溜息」とは何か。ミス・クロフォードなんか現れなければ、エドマンドの心が奪われることもなく、楽しくやっていたのに——という自らの想いと、ラッシュワースの言葉が重なり合ったため、反論できないというより、むしろ同様に置き去りにされた立場にある身として、強い同感から思わず漏れた溜息だったのではないだろうか。

次に、トム・バートラムの友人イエイツの来訪をきっかけに、バートラム屋敷で素人芝居を上演する計画が持ち上がる。一家の主サー・バートラムが、深刻な経済事情のために遠方の地に赴いている留守中、良俗に反する派手な振る舞いをするのに対して、エドマンドとファニーは反対するが¹¹、結局エドマ

11 なぜ素人芝居を演じることがよくないのかという理由は、作品では明らかにされていないが、特に『恋人たちの誓い』の場合は、内容上の問題（不義や、礼節を欠いた女性の振る舞いなどが含まれること）が、理由の一部であることはじゅうぶん推測できる。また、当時のコンダクト・ブックには、女性が芝居を演じることは、称賛されたいという願望や虚栄心を育んだり、異性と親しくなり遠慮深さが損なわれたりするゆえに、好ましくないと説いたものもある。Cf. Thomas Gisborne, *An Enquiry into the Duties of the Female Sex* (1797), Johnson (ed.), p.401.

ンドも、メアリーの相手役を演じたいという誘惑に屈してしまう。演目として選ばれた『恋人たちの誓い』¹²は、貴族ウィルデンハイムが村娘アガサを誘惑して捨て、生まれた不義の子フレデリックが、長じて父に再会するという話や、ウィルデンハイムの娘アミーリアが、牧師アンハルトに愛を告白するという話など、『マンスフィールド・パーク』の物語全体と、内容のうえて微妙に呼応し合う要素を含んでいる。Q・D・リーヴィスも指摘するように、マライアが転落の女アガサを、メアリーが牧師に求愛する女性アミーリアを演じるという配役には、「予言的なアイロニー」¹³が含まれていると言える。

まず、芝居の演目選びの段階で、次は、誰がどの役を演じるかという問題でもめ、ヘンリーの相手役をめぐってパートラム姉妹が争い、結局、負けたジュリアが気分を害して仲間から抜けるという事態になってしまう。要するに、芝居をめぐって人々のエゴイズムが衝突し合うさま自体が、人間模様のドラマのような様相を呈していて、それを、ファニーがひとり観客として、傍から眺めているという状況である¹⁴。

観察者、そして時として不平の聞き役として、ファニーは人々のさまざまな状況に気づく。次の一節では、その一部が語られている。

She [Fanny] knew, also, that poor Mr. Rushworth could seldom get any body to rehearse with him; *his* complaint came before her as well as the rest; and so decided to her eye was her cousin Maria's avoidance of him, and so needlessly often the rehearsal of the first scene

12 Elizabeth Inchbald, *Lovers' Vows* (1798), translation of August von Kotzebue's *Das Kind der Liebe* (1791).

13 Leavis, pp.237-38.

14 ニーナ・アウアバッハは、芝居に限らず人々のすべてのパフォーマンスを「全知的な見物人」として眺めているファニーは、「アクションの外に留まり」、その「沈黙の覗き見行為」ゆえに、読者に近い立場にあると指摘している。Nina Auerbach, "Jane Austen's Dangerous Charm: Feeling as One Ought about Fanny Price" (1983), Johnson (ed.), p.448-49.

between her and Mr. Crawford, that she had soon all the terror of other complaints from *him*. — So far from being all satisfied and all enjoying, she found every body requiring something they had not, and giving occasion of discontent to the others. . . . Fanny believed herself to derive as much innocent enjoyment from the play as any of them; — Henry Crawford acted well, and it was a pleasure to *her* to creep into the theater, and attend the rehearsal of the first act — in spite of the feelings it excited in some speeches for Maria. — Maria she also thought acted well — too well; — and after the first rehearsal or two, Fanny began to be their only audience, and — sometimes as prompter, sometimes as spectator — was often very useful (193; Vol.I, ch.18).

ファニーは、それぞれの人物の能力や心理状態、置かれた立場や状況などを観察する。引用箇所がダッシュが多いのは、この部分では語りの焦点人物ファニーの心理や認識が辿られているためで、自由間接話法の文体的特徴が表れのひとつと見ることができる。ここでは、ラッシュワースが、無能さゆえに、ひとり浮いた存在になっていること、マライアが婚約者を避けて、ヘンリーと二人で第一幕の稽古ばかりを、不必要に繰り返していることなどを、ファニーは見取っている。この第一幕とは、フレデリック役とアガサ役の二人が手を取り合う場面である。それを見ているラッシュワースが、次第に嫉妬心を煽られ、不快感を募らせてゆくという、危険な因子が含まれた箇所である。

しかし、ファニーがそういう場面を特に好んで見ていたという事実も、ここでは漏らされている。下線部で「ファニーは自分が誰にも劣らず、芝居から無邪気な楽しみを得られると思った」と述べられているが、それは果たして“innocent”と言い切れる楽しみだったのだろうか。彼女は、舞台部屋にそっと入って行って、ヘンリーの見事な演技を堪能する喜びを抑えきれない。その楽しみは、「マライアのいくつかの台詞によって引き起こされる感情を別にすれば」(下線部)という制限つきではあるが、ここで曖昧に表現されているその「感情」こそ、二人の男女を過ちへと導く危険な雰囲気を目指しているわけで、逆に言えば、ファニーはそれを感じてもなお、見続けていたということだ。し

かも彼女は、「マライアの演技が上手すぎる」こと——つまり、二人が手を取り合うシーンが、たんなる演技を超えた真に迫ったものを含んでいたことをも、感じ取っている。つまり、悪の匂いを嗅ぎつけつつそれを見て楽しまずにはいられないファニーの心理——これは、完全に“innocent”であるとは言い難いのではないだろうか。

このように、ファニーはヘンリーとマライアの間に危険な関係が芽生え、育ってゆくさまを、場面や状況をとおして観察し、鋭く察知するのである。彼女は決して、それから目を離そうとせず、かといって阻止しようともせず、人間の悪徳の成り行きをひたすら見守り続けるのである。

3. 失恋・嫉妬を描く——ファニーの情念

ファニーが10歳でマンスフィールドに引き取られてきたとき、内気な少女の心を最初に開かせたときから、エドモンドはつねに彼女を慰め励まし、守り、教え導く存在となる。そのため、エドモンドはファニーにとって兄のような存在で、これは兄妹愛から発展して、やがて結婚へと至った物語なのだというように読者は印象づけられる。しかし、それはエドモンドに関して言えることであって、彼とファニーの想いには、相当な落差があることは、見逃してはならないだろう。

ファニーがエドモンドを慕うきっかけになる出来事には、しばしば彼女の兄ウィリアムが絡んでいる。そこに何か、作者の戦略が隠されてはいないだろうか。最初にファニーが心を開くきっかけとなったのも、エドモンドが、彼女の寂しさの原因がウィリアムとの別離にあることを探り出し、彼に手紙を書く手伝いをしてやったことだった。ウィリアムが海に出る前にファニーに会いにやって来たあとも、別れを寂しがるファニーを、エドモンドが慰めてやる。こうして、第2章の終りで、“In return for such services she loved him [Edmund] better than any body in the world except William; her heart was divided between the

two” (25; Vol.I, ch.2) という文章に出会ったとき、私たちはこの“loved”という表現を、兄妹愛のような感情表現として自然に受け取る。しかし、このようにエドモンドとウィリアムをセットにして扱うことによって、作者はファニーのエドモンドに対する思慕が、兄に対する感情と同質であるというように、読者に印象づけようと意図しているのかもしれない。「彼女の心は、二人の間で二分された」という文は、一見、ウィリアムとエドモンドに対するファニーの愛情の同質性を強調しているようにも取れるが、見方を変えると、彼女の心が、兄に対する気持ちと、そうではないもう一人の男性への気持ちという異質な感情によって二分されたというようにも読める。つまり、作者は「兄妹愛」というヴェールで隠そうとしているが、実はファニーのエドモンドに対する思慕は、はじめから恋愛へと発展する萌芽を含んだ感情だったとも言えるのではないだろうか。

ファニーが17歳のころ、彼女の乗馬用の子馬が死んだとき、エドモンドは、自分の馬のうち一頭を取り換えて、彼女に与える。それに対するファニーの感謝の気持ちは、次のように描かれている。

She [Fanny] had not supposed before, that any thing could ever suit her like the old grey poney; but her delight in Edmund's mare was far beyond any former pleasure of the sort; and the addition it was ever receiving in the consideration of that kindness from which her pleasure sprung, was beyond all her words to express. She regarded her cousin as an example of every thing good and great, as possessing worth, which no one but herself could ever appreciate, and as entitled to such gratitude from her, as no feelings could be strong enough to pay. Her sentiments towards him were compounded of all that was respectful, grateful, confiding, and tender (43; Vol.I, ch.4).

「エドモンドの親切で喜びがもたらされたと思うと、喜びはますます募り、とても言葉では言い表せないほどのものになった」というのは、与えられた馬そのものより、与えてくれた人が誰であったかということのほうが、ファニー

の喜びの源泉であったことを、示している。「従兄は善良さと偉大さの模範であると、彼女は思った」という表現によって、作者は周到に、ファニーの思いが、“cousin”という兄に准ずる者に対する尊敬と感謝の念であるかのようなニュアンスを含めているが、後半では、「彼女にしかわからないほどの価値のある人」という熱い表現を用いている。エドマンズの値打ちは自分にしかわからないというファニーの特別な感情は、後々までも貫かれる。「ファニーのエドマンズに対する気持ちには、尊敬、感謝、信頼、優しい気持ちなど、すべての気持ちが混ざり合ったものだった」と述べられているが、そのなかの、とりわけ「優しい (tender)」と曖昧に表現されている感情のなかに、恋愛感情が潜んでいるとも、読むことができるだろう。

ファニーがエドマンズに恋していることが、テキスト上に明らかに顕在化してくるのは、第7章である。彼女が18歳のとき、近隣のグラント夫人の血縁者クロフォード兄妹が、マンスフィールドの新顔として現れる。たちまちエドマンズは、美しく魅力的なメアリー・クロフォードに惹かれるようになり、ファニーの世界に変化が生じる。エドマンズは、メアリーに関する話題を、しばしばファニーの前で持ち出すようになる。「この時期に、この話題に関して、二人の間に危うく意見の不一致が生じ始めそうになった。というのも、エドマンズはミス・クロフォードを称賛する方向に進んでゆき、ファニーのついてゆけない所まで行ってしまいそうだったからだ」(76; Vol.I, ch.7) と語られているように、メアリーという異分子の介入とともに、ファニーはエドマンズとの乖離を意識するようになる。それと同時に、エドマンズに対する自分の気持ちを、はっきりと意識する方向へ導かれてゆくのである。

メアリーが乗馬を習いたいと言い出したことで、ファニーは最初に苦痛を経験することになる。エドマンズは、メアリーの願いをかなえるために、ファニーの馬を時々彼女に貸してやるようにと提案し、ファニーも快くそれに応じる。ところが、メアリーは、乗馬の上達が早いうえに、エドマンズが付き添って教えてくれるのが楽しくて、だんだん止めたくなくなり、予定の時間を超過

してファニーを待たせるようになる。次の一節は、馬の到着を待ち構えているファニーの様子を描いている。

Fanny was ready and waiting, and Mrs. Norris was beginning to scold her for not being gone, and still no horse was announced, no Edmund appeared. To avoid her aunt, and look for him, she went out.

The houses, though scarcely half a mile apart, were not within sight of each other; but by walking fifty yards from the hall door, she could look down the park, and command a view of the parsonage and all its demesnes, gently rising beyond the village road; and in Dr. Grant's meadow she immediately saw the group – Edmund and Miss Crawford both on horseback, riding side by side, Dr. and Mrs. Grant, and Mr. Crawford, with two or three grooms, standing about and looking on. A happy party it appeared to her – all interested in one object – cheerful beyond a doubt, for the sound of merriment ascended even to her. It was a sound which did not make *her* cheerful; she wondered that Edmund should forget her, and felt a pang. She could not turn her eyes from the meadow, she could not help watching all that passed. At first Miss Crawford and her companion made the circuit of the field, which was not small, at a foot's pace; then, at *her* apparent suggestion, they rose into a canter; and to Fanny's timid nature it was most astonishing to see how well she sat. After a few minutes, they stopt entirely, Edmund was close to her, he was speaking to her, he was evidently directing her management of the bridle, he had hold of her hand; she saw it, or the imagination supplied what the eye could not reach. . . . She began to think it rather hard upon the mare to have such double duty; if she were forgotten the poor mare should be remembered (78-79; Vol.I, ch.7).

ファニーは、ノリス伯母に追い立てられて、馬の到着を待たず、やむなく出かける。少し歩くと、グラント家の牧草地が見渡せる。ここは、ファニーの目を通して見たままに描かれ、ファニーによって焦点化されている部分である。人々の集まりが目に入ってくるが、下線部のように、まずはエドモンド、次にミス・クロフォード、そして二人が並んで馬に乗っている状況……というよう

に、ファニーの関心の順に認識が辿られてゆく。続いて、一同の楽しそうな声
が聞こえ、聴覚情報へと移行する。しかし、「その楽しそうな声のさざめきは、
ファニーには楽しくない」という認識がある。これは、自分が疎外されてい
るというファニーの意識を映し出している。「エドモンドは自分のことを忘れ
てしまったのだろうか」という思いに、彼女は「心の痛み (pang)」を感じる。
彼女は、「その光景の一部始終から目が離せない」。とりわけ、メアリーがどん
な乗り方をしているか、エドモンドからどういうふうに教わっているかを、一
挙一動、詳細に観察している。エドモンドがメアリーの近くにいて話しかけ、
手綱の扱い方を教えていると見え、彼女の手を取っている——「それをファ
ニーは見た。あるいは目の届かないところは、想像力で補って見た」(下線部)
とある。遠くから見た眺めなのに、異様に細かく描かれているこの辺りの箇所
では、あたかもファニーの視力が増大しているようだ。見えないものまで、心
の目で見えるというファニーの状況は、エドモンドとメアリーの関係が親密に
なることへの不安を示していて、さらに言うなら、彼女がいかに失恋の苦しみ
を味わっているかを暴露していると言える。

最後のほうの省略箇所には、ファニーがエドモンドを悪く思うまいと、自
分に言い聞かせようとしているさまが描かれている。しかし、「こんなふう
(二人の乗り手によって) 二重に仕事をさせられたのでは、馬には辛いだろう」
と思い始め、結局、「自分は忘れられたとしても、かわいそうな馬のことは忘
れてもらっては困るのだ」という思いへと集束されてゆく。これは、たんに
ファニーの動物愛護心を示しているとは言えない。自分と馬とを同列に並べた
うえで、せめて馬のことだけでも思い出してやってほしいという言い分。それ
は、自己憐憫とひがみの入り混じった皮肉とも読める。彼女をここまで惨めに
した原因は、失恋であったにちがいない。

このあともさらに、馬で遠出する計画が数日続く。エドモンドは帰宅後、
ファニーが、皆からひとり離れて居間の隅にあるソファで休んでいたこと、
頭痛のために元気がない様子をしていることに気づく。ノリス夫人やレディー・

バートラムの話を書くうちに、エドモンドは、ファニーがしばらく馬に乗ることができず、伯母たちの勝手な頼みごとに振り回されて、暑い日差しの中を歩かされていたことを知る。エドモンドは、ファニーをこのような状態のまま放っておいたことを悔い、飲み物を取って来て、彼女に勧める。すると「ファニーは、飲みたくないと言ったけれど、さまざまな思いがこみ上げ涙が出てきて、口をきくより飲むほうが簡単なので、飲むことにした」とある。その「さまざまな思い」がどのような内容であったかを、語り手は、この章の結びで、次のように説明している。

Fanny went to bed with her heart as full as on the first evening of her arrival at the Park. The state of her spirits had probably had its share in her indisposition; for she had been feeling neglected, and been struggling against discontent and envy for some days past. As she leant on the sofa, to which she had retreated that she might not be seen, the pain of her mind had been much beyond that in her head; and the sudden change which Edmund's kindness had then occasioned, made her hardly know how to support herself (87; Vol.I, ch.7).

彼女の不調の原因は、ただ身体的な問題だけではなく、その精神状態にもあったことが、明かされている。「彼女はこの数日間、自分が無視されているように感じ、不満と嫉妬と戦ってきたのだ」と。ここでは、「誰の」とか「誰に対する」という具体的な主体は省かれているが、エドモンドに無視されたことが応えて、彼女が不満を感じ、彼とメアリーの関係に嫉妬していたことを示しているのは、明らかだ。「頭痛よりも、心の痛みのほうがもっと大きかった。そして、エドモンドの親切による突然の変化によって、ファニーはどうやって自分を支えたらよいかわからなくなった」——この表現から読み取れるのは、ファニーの「心の痛み」が失恋にほかならないこと、そして、エドモンドのほんのわずかな親切でも、理性の均衡を失ってしまうほど感情が揺さぶられるというのは、彼を恋している証拠だということである。

ここでも語り手は、最初の文章で、「初めてこの家にやって来た日の晩と同じように」と述べて、ファニーの幼いイメージを喚起することにより、表現に抑制を加えているが、いまや18歳になったファニーのエドモンドに対する感情は、もはや兄妹愛では規定しきれないものとなっていることが暗示されている。というよりも、ファニーはいつとも知れぬ初めのころから、ずっとエドモンドを恋していて、ひ弱であっても、実は早熟な女性であったと言えるかもしれない。

その後もファニーは、エドモンドがメアリーへの恋心を募らせ、求婚の意思を固めてゆくさまを、重く沈んだ心で、傍から、あるいは間近で観察し続ける。その一方で、彼女はメアリーの欠点を細かく観察し、その本性を見極めようとしている。メアリーのほうは、概して、ファニーに表裏のない好意を示しているのに対して、ファニーのほうは、表面の態度と心の中は正反対である。おとなしいイメージに反し、恋敵に対するファニーの嫌悪感がむき出しになっている箇所を、いくつか例に挙げてみよう。

エドモンドが、ファニーとメアリーは「ぼくにとっての、この世で最愛の二人 (the two dearest objects I have on earth)」であると言ったとき、心乱れたファニーの思いは、次のように語られている。

She [Fanny] was one of his [Edmund's] two dearest – that must support her. But the other! – the first! She had never heard him speak so openly before, and though it told her no more than what she had long perceived, it was a stab; – for it told of his own convictions and views. They were decided. He would marry Miss Crawford. It was a stab, in spite of every longstanding expectation; and she was obliged to repeat again and again that she was one of his two dearest, before the words gave her any sensation. Could she believe Miss Crawford to deserve him, it would be – Oh! how different would it be – how far more tolerable! But he was deceived in her; he gave her merits which she had not; her faults were what they had ever been, but he saw them no longer (306-07; Vol.II, ch.9).

自分が彼の最愛の二人のうちのひとりなのだという思いを反芻しながら、ファニーはそれにしがみつく。しかし、あともうひとりがメアリーだという事実が、彼女には耐えがたく感じられ、それは下線部で“stab”という言葉により繰り返し表現されているように、文字通り彼女の心を刺し貫き激しい痛みをもたらす。ファニーは、メアリーがエドマンズの結婚相手として相応しくないと断定し、彼が騙され彼女を買いかぶっているのだと考える。感嘆符やダッシュが繰り返し表れるなど、ここでは自由間接話法の特徴が見られ、ファニーがいかに苛立ち興奮しているかが伝わってくる。その奥には、恋敵に対する嫌悪感が潜んでいることがわかる。

エドマンズが聖職者になることに対して、メアリーは難色を示し続けるが、やがてその問題を乗り越えて、二人は結婚するだろうと、ファニーは予想する。次の一節は、そうしたファニーの思いを、彼女を焦点人物に据えることによって、描き出した箇所である。

His [Edmund's] good and her [Mary's] bad feelings yielded to love, and such love must unite them. . . . Her acceptance must be as certain as his offer; and yet, there were bad feelings still remaining which made the prospect of it most sorrowful to her, independently - she [Fanny] believed independently of self. . . . She might love, but she did not deserve Edmund by any other sentiment. Fanny believed there was scarcely a second feeling in common between them; and she may be forgiven by older sages, for looking on the chance of Miss Crawford's future improvement as nearly desperate, for thinking that if Edmund's influence in this season of love, had already done so little in clearing her judgment, and regulating her notions, his worth would be finally wasted on her even in years of matrimony (423-24; Vol.III, ch.6).

「エドマンズのよい心とメアリーの悪い心が、愛に屈する」とか、彼の求婚を受け入れても「なお彼女の悪い心は残るだろうから、それを思っただけでも嘆かわしい」というような表現には、メアリーを“bad feelings”と直結させる

ファニーの見方が表れている。「愛以外のいかなる感情においても、ミス・クロフォードはエドモンドに値しない」、「ミス・クロフォードが将来よくなる見込みは、ほぼ絶望的」というように、ファニーは畳みかけるように厳しい裁断を下す。恋敵に対する彼女の批判は、容赦のないものであることが、ここでもうかがわれる。

次の一節は、ロンドン滞在中のメアリーからの手紙を読んだあと、ファニーが、メアリーとエドモンドの結婚の見込みについて、思いを巡らす箇所の一部である。

She [Mary] would try to be more ambitious than her heart would allow. She would hesitate, she would teaze, she would condition, she would require a great deal, but she would finally accept. This was Fanny's most frequent expectation. . . . The prospect for her cousin grew worse and worse. The woman who could speak of him, and speak only of his appearance! — What an unworthy attachment! — To be deriving support from the commendations of Mrs. Fraser! *She* who had known him intimately half a year! Fanny was ashamed of her (484; Vol.III, ch.12).

「メアリーなら、自分の心の許す以上に、大きく出てこようとするだろう。二の足を踏んでみたり、しつこくせがんだり、条件をつけたり、ありったけの要求をしたりしたあげく、申し込みを受けるのだろう」という予想には、ファニーがいかにメアリーを嫌悪すべき人間だと思っているかが、ありありと表れている。「エドモンドのことを話すのに、その外観のことしか言えない」、しかも他人の称賛の言葉で後押ししてもらわなければならないとは「何とつまらない愛情か!」という憤懣。そこには、エドモンドの値打ちをわかっているのは自分だけなのに、メアリーに彼を譲るのはもったいないという悔しさが滲み出ている。

トムが危険な病に倒れたとき、ファニーは、バートラム一家には肺を病んだ

者はいないから、たぶん彼の命は大丈夫だろうと楽観しつつも、「ミス・クロフォードは何事につけても運のいい人だから、自分本位で虚栄心の強い彼女なら、エドモンドが一人息子になれば、ついていると思うだろう」(498; Vol.III, ch.14) と考える。長男が死ねば、後継ぎに昇格する次男は、結婚の条件がよくなることが、まだ回復の見込みのある長男を目の前にして、ファニーにも、少なくとも思い浮かぶということ。これは、清純なファニーも、俗世間とまるで無関係というわけではなく、ある程度心が汚れているということを示している。もちろん、ファニーの勘が正しかったことは、あとでメアリーの手紙のなかで立証されることになる。しかし、後にエドモンドがメアリーに幻滅し目が覚めたときにも、ファニーはこのことを彼に対して仄めかし、黙ってはいられなかった。

愛する男性が、自分より価値のない女性に恋するさまを、じっと見ながら耐えねばならない苦悩を描くことが、この作品の中核をなす部分であると、筆者は解釈する。そのなかでも、ファニーの苦悩が頂点に達した部分は、次のくだりであると考えられる。作品の終盤近く、エドモンドが、メアリーに対する悩ましげな思いを書き綴った手紙を、ファニーに送ってくる。そこには、「ファニー、ぼくにはメアリーのことが諦められない。彼女こそ、ぼくが妻にしてもいいと思った、ただ一人の女性なんだ」(489; Vol.III, ch.13) というような告白さえ述べられている。それを読んだファニーの反応は、次のように描かれる。

“I never will – no, I certainly never will wish for a letter again,” was Fanny’s secret declaration, as she finished this. “What do they bring but disappointment and sorrow? . . .” . . . She was almost vexed into displeasure, and anger, against Edmund. “There is no good in this delay,” said she. “Why is not it settled? – He is blinded, and nothing will open his eyes, nothing can, after having had truths before him so long in vain. – He will marry her, and be poor and miserable. God grant that her influence do not make him cease to be respectable!” (491-92; Vol.III, ch.13)

ここでは、ファニーの心の思いは、直接話法で示されている。「もう結構、二度と手紙なんかもらいたくない」——これは短い言葉であるが、絶望的な失恋と傷心、幻滅がこめられた表現と読むことができる。ここでファニーは初めて、エドモンドに対して、不快感と怒りを覚える。「何をぐずぐずしているの、早く決めてしまえばいいのに。彼は目が眩んでいる。これだけ長い間真実を目の前にしながら、見えないのなら、もうどうしようもない。メアリーと結婚して、哀れなみじめな思いをすることになるでしょうよ。どうか彼女の影響のせいで、彼の品位まで落ちてしまうことがありませんように！」と、投げやりな思いを吐き出している。恋する男性を、相手の女性もろとも地に突き落とす——ファニーの苦悩は、ついにそこにまで至ったわけだ。

しかしこのあと、そんな手紙でも、やはりファニーには有り難いように思えてくる。こうして未練が生じ、どうしても恋心が捨てきれないファニーの心のさまがよく描かれている。

以上、例を挙げて見てきたように、ファニーはかなり激しい情念を秘めた人物であることがわかる。そして、その情念が抑制されているのは、ただ表に出す勇気がないという理由に根差しているだけではなく、抑制するに見合う強い忍耐力を彼女が持ち合わせている証とも言えるだろう。

4. 家族・環境の問題——ファニーは俗物か？

貧しい家庭に育ち、裕福な親戚に引き取られたファニーは、実家のプライス家からは厄介払いされた形で、他方、引き取り先のパートラム家では、居候として一段低い処遇を受ける。安定した身の置き場のない孤立状態にあるファニーが、二つの世界のいずれに属する人間であるか——その答えが出るのは、物語の終りのほうで、ファニーがポーツマスに里帰りするという出来事においてである。これはそもそも、サー・パートラムが、ヘンリーの求婚を断ったファニーの再考を促すために目論んだ計画であり、作品全体のなかで占める割

合はごく一部にすぎないが、ファニーという人物について考えるうえで、重要な部分であると考えられる。

何年ぶりに帰郷したファニーは、実の両親や弟妹たちとの再会を果たし、しばらく彼らと生活を共にするが、それは彼女自身の期待に反し、喜ばしい体験ではなかった。プライス氏がいかに酒飲みで、大声で悪態をつき、粗野で下品な父親であるか。プライス夫人がいかに愛情が薄く、不平不満に没頭するばかりの、無能な母親か——それは、両親に失望したファニーの目を通して、突き放したように描かれる。また、年下の弟妹たちの身なりが不潔でみすぼらしいさま、家の中が騒々しく、たえず諍いが生じているさまなども、ファニーの目をとおして描かれ、彼女がいかに驚きあきれ、神経がまいりきっているかがうかがわれる。家中の者がみな落ち着きなく、誰もがファニーに対して無関心であることに對しても、彼女は失望を感じずにはいられない。

ファニーが違和感を覚えるのは、たんに一家の人々に対してだけではない。彼女は、家の狭苦しさや家具の貧弱さといった物理的環境に對しても、耐えがたい思いを味わう。彼女がいかに、その環境に對して生理的な拒否反応を示しているかを、最も鮮明に描き出しているのは、次の箇所であろう。

No candle was *now* wanted. The sun was yet an hour and half above the horizon. She [Fanny] felt that she had, indeed, been three months there; and the sun's rays falling strongly into the parlour, instead of cheering, made her still more melancholy; for sun shine appeared to her a totally different thing in a town and in the country. Here, its power was only a glare, a stifling, sickly glare, serving but to bring forward stains and dirt that might otherwise have slept. There was neither health nor gaiety in sun-shine in a town. She sat in a blaze of oppressive heat, in a cloud of moving dust; and her eyes could only wander from the walls marked by her father's head, to the table cut and knotted by her brothers, where stood the tea-board never thoroughly cleaned, the cups and saucers wiped in streaks, the milk a mixture of motes floating in thin blue, and the bread and butter growing every minute more greasy than even Rebecca's hands had first produced it (508; Vol.III, ch.15).

居間に強い日光が差し込んで来たとき、ファニーは気分が明るくなるかわりに、ますます憂鬱になる。陽光の効果さえも、田舎と都会とでは違うのだというように、差別化される。田舎では、陽光は健康的で心楽しいものであるけれど、「ここ都会では、太陽光線は、息苦しく吐き気を催させるほど、ざらざらとまぶしく、ふだんは見えない汚れや埃などを照らし出す」というように、ファニーには感じられる。むしむしとするような熱気と、埃の舞うなかに座りながら、ファニーは、父親の頭が当たってできた壁の跡や、弟たちが傷つけた食卓、不潔なお盆、拭き方が縞状になったカップや受け皿、埃の浮いたミルク、バターでべたべたとしたパンなどを目で追う。

不潔さを容赦なく浮かび上がらせるという日光の悪しき側面を、即物的に描き出し、そのまぶしさに耐えきれない弱り切った神経の病理学的現象をリアリストティックに描くというやり方——これは、オースティンの小説のみならず、当時の文学作品のなかでも珍しいと言えるのではないだろうか。自然主義に通じる表現と言っても過言ではないような、技法的な新しい要素さえ、そこには見出される。ファニーによって焦点化されたこのような語りの部分からも、彼女の実家に対する嫌悪感にも似た違和感が、浮かび上がってくる。

ファニーは結局、ポーツマスの実家への里帰りという体験を経て、次のように、マンスフィールドこそ、今や自分にとっては真のホームなのだということを認識するに至る。

Such was the home which was to put Mansfield out of her [Fanny's] head, and teach her to think of her cousin Edmund with moderated feelings. On the contrary, she could think of nothing but Mansfield, its beloved inmates, its happy ways. Every thing where she now was in full contrast to it. The elegance, propriety, harmony – and perhaps, above all, the peace and tranquillity of Mansfield, were brought to her remembrance every hour of the day, by the prevalence of every thing opposite to them *here* (453; Vol.III, ch.8).

マンスフィールドやエドモンドから距離を置こうというファニー自身の意図にもかかわらず、彼女がポーツマスで発見したのは、その騒音と不作法、混乱の世界とは対極にある、マンスフィールドの優雅で礼節正しい調和の世界にほかならなかったのだ。ここで注目したいのは、ファニーが「マンフィールドとその同居人、その幸福な暮らし」と呼ぶとき、その懐かしい世界を構成するのは、エドモンドひとりではなく、パートラム家の娘たちも含まれていて、ノリス夫人さえ除外されていないことである。現にファニーは、母プライス夫人と比較すると、ノリス夫人にさえ、几帳面で活動的といった美点があるとし、「ノリス夫人なら、収入が少なく、九人の子供を抱えていても、もっとまともな母親になっていただろう」(451; Vol.III, ch.8)と感じている。玉の輿にのったパートラム夫人とは、もともと気質が似ていたにもかかわらず、大きな隔たりができ、思慮に欠け不精な女性へと品位を落としてしまったというように、ファニーは母親を客観的に分析している。

さらにこの作品では、身分や環境の相違が、人間や人間関係を変えてしまうことを、もう一步推し進めて描いている。ポーツマスに滞在中、メアリーからの手紙が届いたとき、ファニーは次のような反応を示している。

She [Fanny] was really glad to receive the letter when it did come. In her present exile from good society, and distance from every thing that had been wont to interest her, a letter from one belonging to the set where her heart lived, written with affection, and some degree of elegance, was thoroughly acceptable (455; Vol.III, ch.9).

あれほど嫌悪している女性からの、あまり欲しくないと思っていた手紙である。しかし予想に反して、メアリーからの手紙を手にして嬉しかったのは、「上品な社会から追放され、ファニーの関心をふだんそるようなあらゆるものからかけ離れた現在の状況」においては、自分の心の住まう世界に属する人からの愛情深い優雅な手紙は、歓迎すべきものであった、というわけだ。ポー

ツマスのような異世界にいと、メアリーはむしろ同族ということになり、相対的に格上げされているのがわかる。ここでは、ファニーにとっては、倫理的な基準よりも、むしろ階級的な基準のほうが、人との距離を決定づけるより大きな要因となっていることがうかがわれる。

そして、ヘンリーが突然ポーツマスを訪ねて来たとき、ファニーはどのように反応しただろうか。彼女は、自分が毛嫌いし、求婚を断った相手の男性が、はるかに身分の劣る自分の貧しい実家を訪ねてきたとき、自分の身内を恥じるのである。次の箇所は、ヘンリーと散歩している途中、父に出くわしたときのファニーの想いが描かれている。

It was soon pain upon pain, confusion upon confusion; for they were hardly in the High Street, before they met her father, whose appearance was not the better from its being Saturday. He stopt; and, ungentlemanlike as he looked, Fanny was obliged to introduce him to Mr. Crawford. She could not have a doubt of the manner in which Mr. Crawford must be struck. He must be ashamed and disgusted altogether. He must soon give her up, and cease to have the smallest inclination for the match; and yet, though she had been so much wanting his affection to be cured, this was a sort of cure that would be almost as bad as the complaint ... (466; Vol.III, ch.10).

ファニーは、みすばらしい身なりをした下品な父親を、ヘンリーに引き合わせることに對して、極度の苦痛と困惑を覚える。「見た目に紳士らしくないからといって、ファニーは、父をクロフォード氏に紹介しないわけにはいかなかった」とある。これは、たんに父の風采を恥じているわけではなく、紳士でない親を、紳士に見せるのが恥づかしくて、できることなら親子であること隠したいという階級意識の表れとして、読むこともできるかと思う。またファニーは、ヘンリーが驚いて嫌気がさし、自分と結婚したいという気がなくなるだろうと予想すると、耐えがたい気持ちになる。

このあと省略した部分で、語り手は、女心とはふつうそのようなものだとして一般

化して、ファニーを弁護している。しかし、これまで頑なまでに自分の我を通す潔癖なファニーの姿を見てきた読者としては、やはり、この期に及んでヘンリーに見栄を張りたがる彼女のなかに、何か矛盾するもの——それは俗物性と言ってしまってもよいかもしれない——が混ざっているように感じられるのである¹⁵。

このころ、ファニーの気持ちが少しクロフォードへと傾く。ポーツマスを訪ねて来たときのクロフォードの態度が、礼儀正しく非の打ちどころのないもので、彼の人格的な進歩をファニーが認めたことは、確かである。しかし、実家の貧しさ、下品さに幻滅しているときに、道徳的に墮落していると見定め嫌っていた男性に対して心が動いたというタイミングは、必ずしも偶然とは言えないのではないだろうか。つまり、ファニーのなかに潜む世俗性によって、クロフォードのほうへ針が振れたということも、否定できないのである。

ファニーは親に捨てられ、疎外感を味わうが、この里帰りという体験を経て、逆に彼女のほうが、自分を失望させた親を、心理的に見捨て、実家を疎外したとも言える。もっともファニー自身も、そういう自分の感じ方に対して、罪の意識を拭いきることができない。しかし、いったん豊かな環境に慣れた者が、貧しさや下品さに対して感じる違和感はいかんともしがたく、人を隔てる環境の相違という壁は、時として乗り越えがたい場合があるということを、この作品は描き切っている。兄ウィリアムが海軍で昇任することや、最後に、ファニーが妹スーザンをマンスフィールドに連れ帰るという挿話は、ファニーにとっては一種の贖罪のような役割を果たしていて、女主人公を弁護しようとする作者の意図が働いていると言えるかもしれない。

15 成り上がり者が、自分が嫌っている者に対して、身内を恥じるという挿話は、たとえばディケンズの *Great Expectations* (1861) などにも見られる。ロンドンで紳士となったピップが、故郷から義理の兄ジョーが訪ねて来たとき、この善良で無骨な鍛冶屋を見られることを最も恐れた相手は、自分が軽蔑している学友ドラムルだった。のちにピップは、自分の卑劣さに恥じ入ることになる。状況・立場はかなり異なるが、ファニーが置かれた状況は、これと一脈通じるところがあると言えるかもしれない。

5. おわりに——作者の戦略

以上、ファニーが焦点人物になっている部分を中心に、テキストの語りを検討しながら、この女主人公の内面を探ってきた。それにより、ファニーが悪の観察者であり、恋情や嫉妬、嫌悪感などの情念、そして、いくぶんかは世俗性も持ち合わせているといった側面を浮かび上がらせることができた。

このような属性を持った異色の女主人公や、環境の影響というような新しい問題を、読者の反発を招かぬように巧みに描くには、かなり周到な仕組みが必要になってくる。そのためにも作者は、女主人公を、一見当時のコンダクト・ブックから抜け出して来たかのように従順で控えめな人物に仕立てて、その正体を隠しておくという方法を選んだのではないだろうか。

そのような戦略を用いて、オースティンがいちばん書きたかったものは何か。平凡な結論ながら、それは、愛する対象とその周りの世界をひたすら見つめながら待ち続けるという恋愛のあり方ではなかったかと思う。最終的には、ファニーは、待ち望んだ相手から求婚され、マンスフィールド・パークの女主人となる。それは多分に偶然や運に左右された結果であることは、否定できない。しかし、彼女のやり方には、必ずしも弱いか、消極的とか、旧態依然としているとか、一概に言い切れないものがある。そもそもファニーにとっては、自らに課せられた分際からして、禁じられた恋だった。そのうえ、ヘンリーからの求婚に応じるという容易な逃げ道があったにもかかわらず、彼女は逃げなかったのである。逃げなかったのは、ファウラーが言うような「虚栄の市に誘い込まれることを避ける」¹⁶ 敬虔さゆえではなく、たん

16 ファウラーは、「*Mansfield Park* はジェイン・オースティンの *Pilgrim's Progress* とも言うべき作品で、そこでファニーは、ヘンリー・クロフォードによって *Vanity Fair* に誘い込まれるのを避け、素人芝居や戯れの恋、駆け落ち、姦通など、他の8名の作中人物たちが陥った泥沼をよけて通る」と述べている (Fowler, 164)。

にエドモンドへの想いがあきらめられなかったからにすぎない。ファニーという人物の中核をなしているのは、この決してあきらめようとしない忍耐強さであると言ってもよいだろう。

最後に、作品中で、ファニーが最も幸福感を感じるピークの場면을挙げて、本論を締め括ることにしたい。それは（最終章で、ファニーとエドモンドが結婚するに至った経緯が描かれている部分は、すでにドラマは終わっていて、語り手によるまとめの部分なので除くこととする）、マライアに続きジュリアが駆け落ちし、エドモンドとメアリーの結婚も絶望的になったことを告げて、ファニーにマンズフィールドに戻るようと言ってきたエドモンドからの手紙を、彼女が読み終えた瞬間である。その一節は、次のようにファニーによって焦点化されている。

Never had Fanny more wanted a cordial. Never had she felt such a one as this letter contained. To-morrow! to leave Portsmouth to-morrow! She was, she felt she was, in the greatest danger of being exquisitely happy, while so many were miserable. The evil which brought such good to her! She dreaded lest she should learn to be insensible of it. To be going so soon, sent for so kindly, sent for as a comfort, and with leave to take Susan, was altogether such a combination of blessings as set her heart in a glow, and for a time, seemed to distance every pain, and make her incapable of suitably sharing the distress even of those whose distress she thought of most (513; Vol.III, ch.15).

ファニーは、多くの人たちが不幸な思いをしているとき、自分がこのうえなく幸せに感じるものが危険であると自覚しつつも、人々にとっての悪が、自分にとっては喜ばしいものだ、思わずにはいられない。とにかくマンズフィールドに帰れる、それも結構な待遇で、妹を連れて……と利点を数え上げていると、「喜びで胸が熱くなり、あらゆる苦痛が遠のいてゆく」というように、まさに至福の状態である。人々が不幸に沈んでいるとき、幸福の絶頂にのぼりつめるというのが、ファニーの勝利の形なのである。そのような力

学的構造¹⁷のもとに配置された女主人公であるとするなら、不遇時代のファニーのイメージは、運命の浮き沈みに伴って一時的に表れ出たものにすぎなかったということになるだろう。

隠された実像が次第に浮かび上がってくるにつれて、批評家たちの懸念や不満にもかかわらず、ファニーは生き生きとした魅力を増す。概して、オースティンという作家は、読者にとって「肘掛け椅子に座って話しかけてくるような」¹⁸、あるいは「信頼できる旅の道連れ」¹⁹のような気の許せる友好的なタイプの作家ではなく、読みの浅い読者を容赦なく切り捨ててしまうような意地の悪さがある。ファニー・プライスを、額面通り、存在感の希薄な人物と受け取るか、あるいは、その輝きを掘り起こしてみせるかは、読者の力量に委ねられているようだ。油断のならないしたたかな作者は、あたかも、どこまで作品が読めるか、読者のレベルを試しているように思えるのである。

17 この力学的構造について、さらに解釈を推し進めた例としては、アウアバツハのかなり極端な説が挙げられる。アウアバツハは、ファニーの「暗い側面」、「怪物性と周縁性」に着目し、つねにアウトサイダーとして留まり「セレモニーに害をもたらす者、家族の分裂のもと」であるファニーを、『ベオウルフ』のグレンデルやロマン主義文学の悪漢たち、『フランケンシュタイン』の怪物などに引き比べ、あるいは、「食べ物を嫌い、他人の活動を心でむさぼるファニーの傾向」を吸血鬼になぞらえる (Auerbach, pp.445-57)。

18 ジョージ・エリオットは、物語作家としてのフィールディングの態度をこのように形容し (George Eliot, *Middlemarch*, ch.15)、デイヴィッド・セシルは、サッカーの語り手のタイプをこのように規定する (David Cecil, *The Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation*, 1934; rpt. Harmondsworth: Penguin, 1948, p.152)。

19 ウェイン・ブースは、このようなタイプの例として、ジョージ・エリオットの語り手を挙げている。Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction*, 2nd. Edition (Chicago: The University of Chicago Press, 1983), pp.213-14.